曲亭馬琴著

金毘羅船利生纜初編

六冊合巻

溪齋英泉画

へ13
3159
1

特 へ13
3159
1-11
へ13
3159
1
昭和九年
九月二〇日
購求

虚誕の異名さまざまあり浮圖家の方便荘氏の寓言武士の武畧遊女の手管
权商賈の空拵言丈夫気の虚誕ふあらざりけり虚は是實の對ひ花
実ハまこと邪説暴行もさまざまのを善巧といひ戯謔といの神道真實佛語も吻合
神糎両部の業合する金毘羅舩と題し一ツ櫂識ら讃州象頭山自畧の先なる智
恵の海に拠取揖はやと作者が獲ふ帆を揚て思ひつゝまを友代筆ふ漕ぐ今昔
和漢の渉るも少許類抜彼天満の何侯王の西遊記より故事附くゆう庵く物ふ
草稿のかゝ代のむう佛在世められもるゐるの
うう虫さうそおやとの神も照覧佛ハ兄と座
裏をぬく鶴の脛る長物語の今茲初編の序ひきうう追く接木の花の春幾編
續く弥其気までの考果ーうきのうう千世ふ八千世をかけ向かとまく敬て序ス

正月新版

曲亭馬琴述

疑ひなく善をなすとき。
ことを信といふ。
信の至ると
深きの。
ことを深信と
いふ深信懈
ることのへ。
禍を轉じて福となすまでのこと。
されどその願ひ成就
せざるといふことなし。
吁深信の
徳偉なるかな。

金毘羅毎歳詣の
行者
金野伍平太

長堀橋の
船宿金ひら野屋
むすめ
女児

賛曰
わろ直き
獣なり
やは
山の
名社
家の
頭の
神宿る
かな

金毘羅
毎歳詣の
行者
神酒講十郎

千早振る神世のむかし
火神軻遇突智の
生れしとき
母の尊
伊弉冊へ
焼きてくえさう
神去りし
伊弉
諾尊
怒りの
軻遇突智を
斬る

天地開闢
夫婦権輿
陽尊神

今火を鑽り薪と積み又婦女
子の月経を火に焼
その縁故なり
とのたまふ
賛曰
吾妹子が
陰の
火と
のたまひしを
かくや
軻遇突智を
斬る

陰尊神
火神
軻遇突智

火の神軻遇
突智の破ると
とれ凝血ハ石となる。
その石の中
一個の神化生ゐ
とまを石折の神とのふ佛経ゐ
いふ金毘羅天王又金毘羅
天童子本地不動と
いふものとの神ゐく

東方 陽徳の母神

神通不可思議
天石折神

似うに其然らん乎。
然らん乎。
貧曰
百億の須彌
石の隙
生出て
動きる世を
まりて
そ
ま

西方 陰徳の師表

小角（加茂役公氏ゐ）大和葛城郡茅原村の人なり。三十二歳の
ときより葛城山ふもと松子と
いふ所にて藤葛を衣とし孔雀
明王の呪文を持して飛行自在を得
たり。一日山神をして金峯山ゟ石橋を
造らしむ。その速やかなるを怒りて
一言主の神を呪縛す。又常ゟ
小角ゟ使役する二童鬼
あり。その中ゟ前鬼ハ
男の姿、後鬼ハ
女なり。

後鬼の変相

山妻吉向峯

役行者
小角

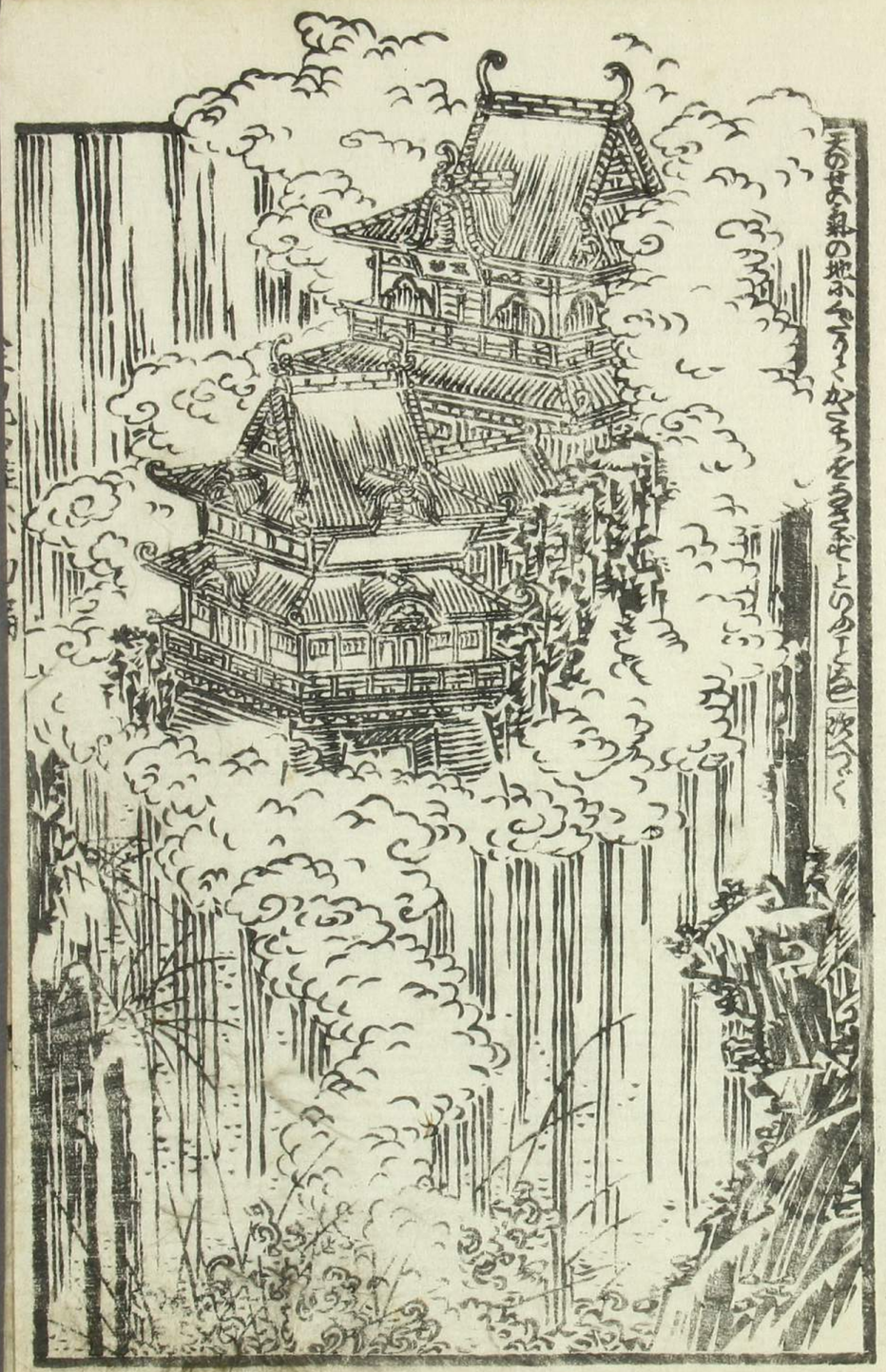
又これらを前鬼後鬼とゝのへ
この鬼ハ大和の生駒嶽ゟ住り。
後ゟ小角ゟ捕れて大峯ゟ葺嶺
その迹ゟ精舎を建て鬼取寺とよべり
ゟつて其小角ゟその名を世の人ハ
役行者と唱ゟ天性至孝ゟありれば
その母を鉢ゟ載て渡唐せしゟの
ち太郎の大神仙ゟ後世ゟ福を賜ふて
神変大菩薩と称せらる。賛曰
葛城や幾重の山を踏越て
君がめぐみの
いかりなし

前鬼の変相

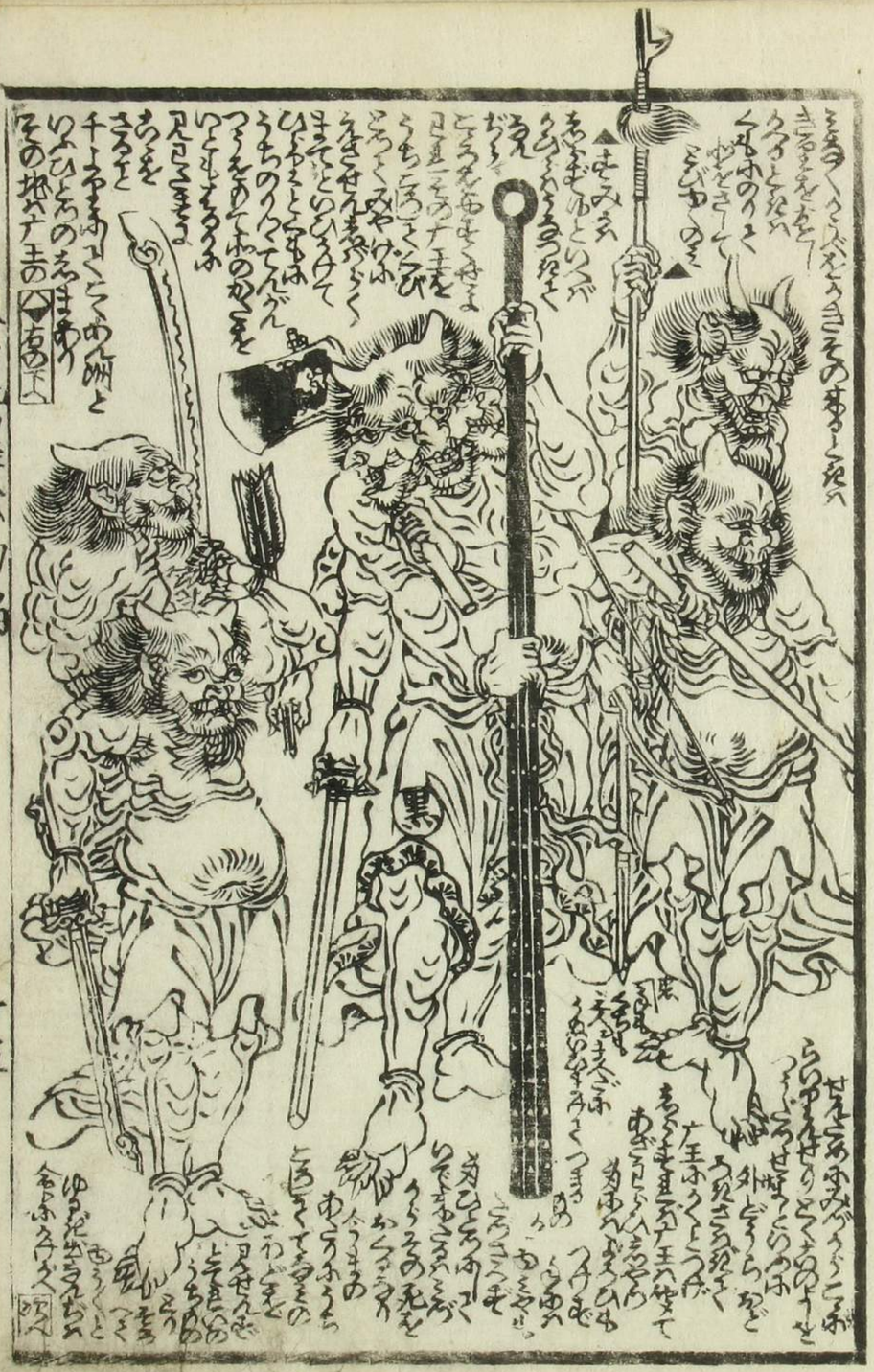
雄夫陀羅ゟ

五

大坂長堀橋
金毘羅船
圖の宿船



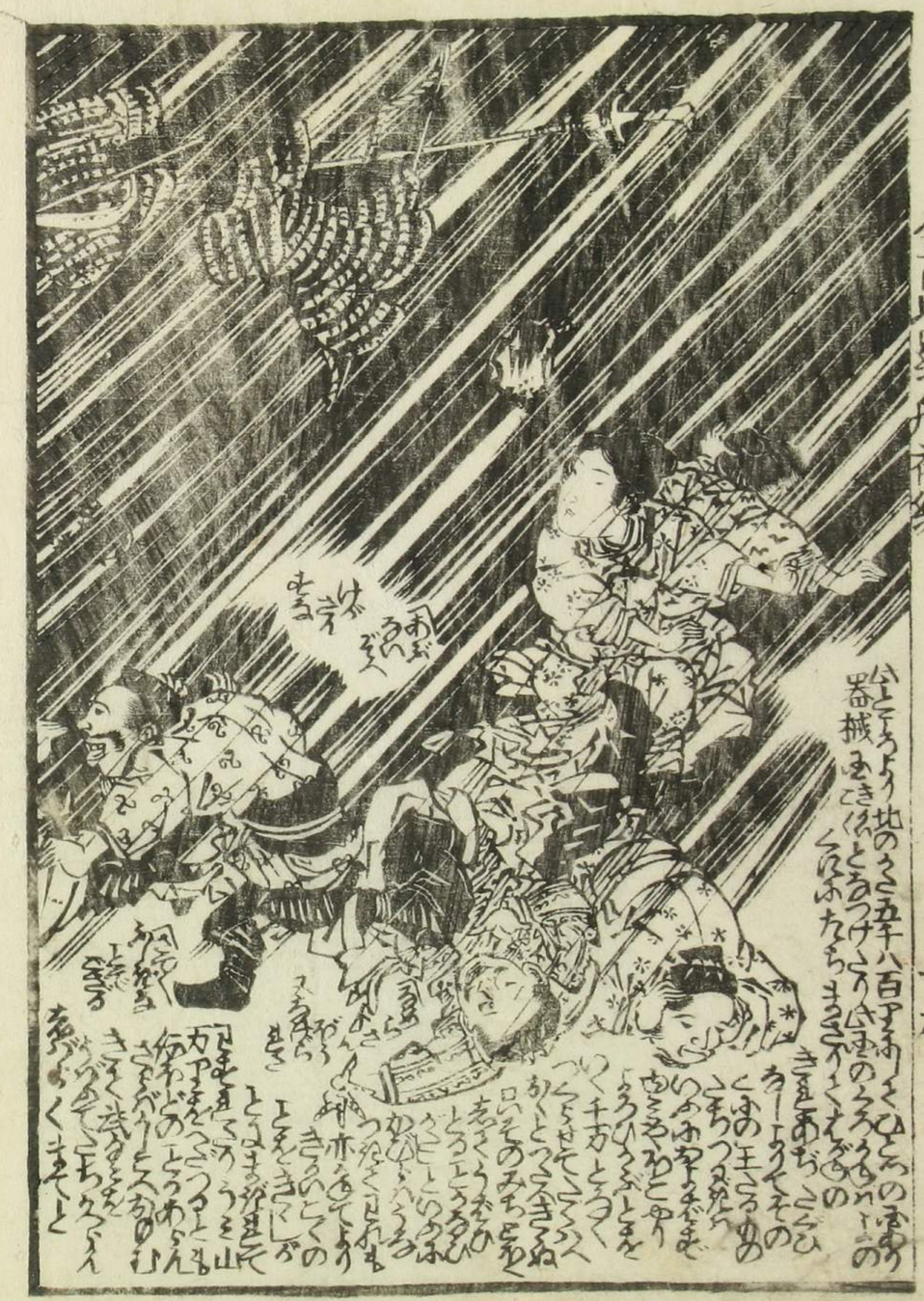
金毘羅御船入絵

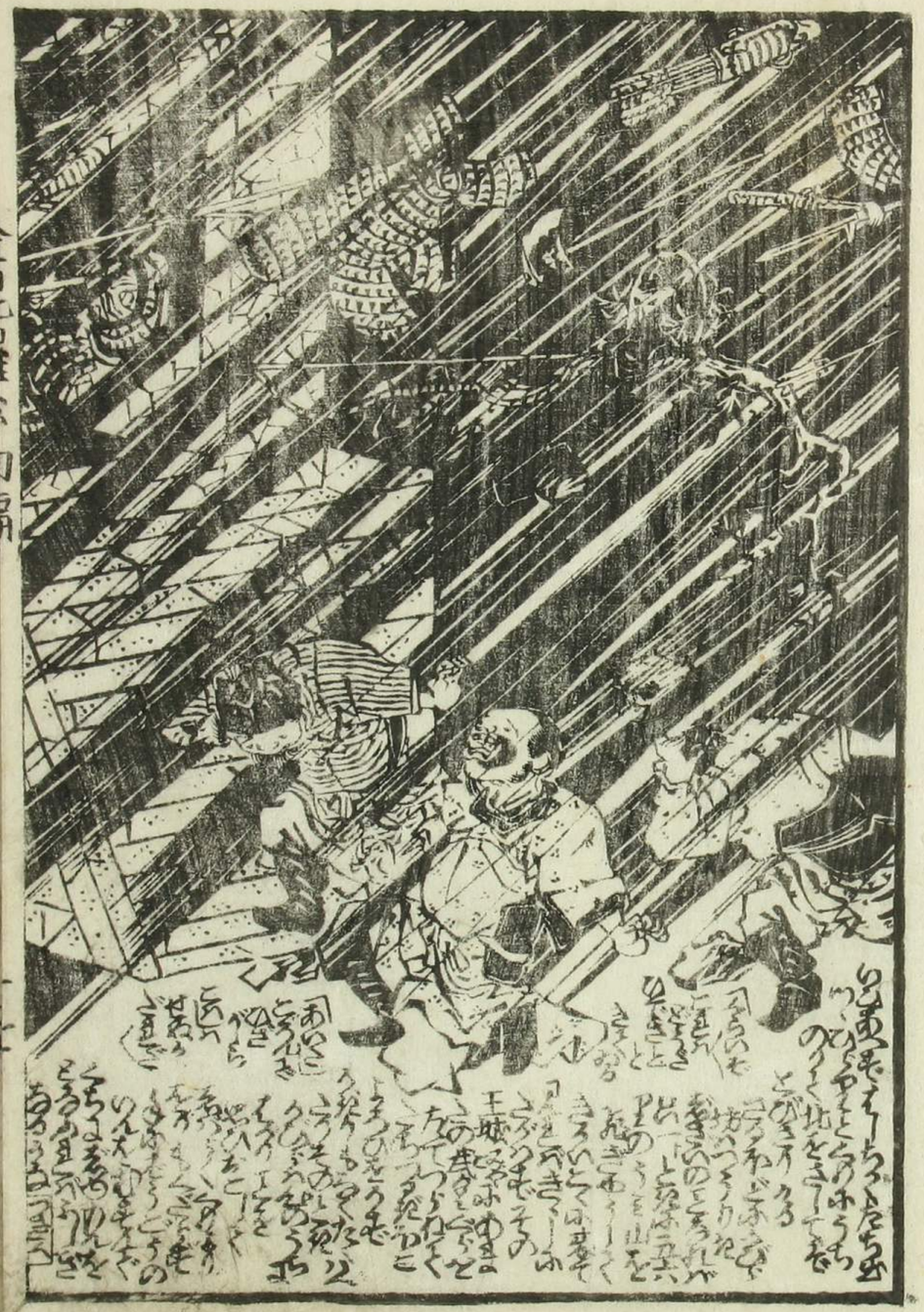


馬琴作

英泉画

筆耕 千形仲道

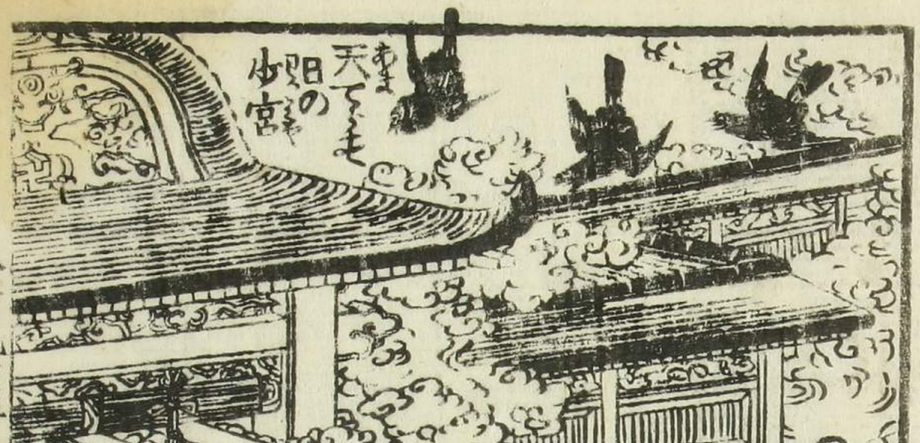




岩

蛤貝媛神
左の上

右の上


天てんも
旧の
御宮

家傳神女湯 百代百病
精製奇應丸 百代二朱
中百代五朱小百代半
真方能胆黒丸子 一包代五百
婦人つねむ 一包代金四匁